

令和5年9月11日

南の風 FIBA 男子 W 杯から見えるもの

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

ドイツ代表の皆さん、スタッフそして関係者、そしてドイツ国民の皆さん

W 杯 2023 優勝おめでとうございます！！

ドイツがやりました！！ 悲願の世界一、初優勝です！！

ドイツは1次ラウンドから一度も負けなしの全勝優勝でした。ドイツはデニス・シュルーダー（トロント・ラプターズ）、フランツ・ワグナー（オランダ・マジック）、ダニエル・タイス（インディアナ・ペイサーズ）、アンドレアス・オプスト（バイエルン・ミュンヘン）、ヨハネス・フォウクトマン（オリンピア・ミラノ）がスターターでした。

ドイツの PG シュルーダー選手は常にコートを支配し、安定したゲーム運びを見せ、ここ一番の場面では自ら3P シュートやペイントアタックを決め、チームを勝利に導きました。

一方のセルビアは、ボグダン・ボグダノビッチ（アトランタ・ホークス）、ニコラ・ヨビッチ（マイアミ・ヒート）、ステファン・ヨビッチ（バスケットサラゴサ 2002）、オグニエン・ドブリッチ（ヴィルトゥス・ボローニャ）、ニコラ・ミルチノフ（CSKA モスクワ）がスターターとして名を連ね、1Q から接戦を繰り広げました。特に前半は、高確率で3P、2P のシュートを着実に決めるとともに、激しく当たるディフェンスでシーズンゲームを繰り広げ、47-47 の同点でドイツに一歩も譲らない展開でした。後半はシュートの精度がやや落ち苦しい流れとなりましたが、最後までドイツに食らいつきあと一歩まで追い込みました。

スターターの他にも、ドイツのイザック・ボンガ（バイエルン・ミュンヘン）選手は、3Q セルビアを突き放す3P シュートを沈めたり、体を張ったディフェンスでチームに貢献しました。セルビアではアレクサ・アブラモビッチ（KK パルチザン）選手が、ドイツのシュルーダー選手とマッチアップし、しつこいディフェンスで苦しめたり、4Q で3点差に迫る3P シュートを決めたりして活躍しました。

なお、セルビアのポリサ・シマニッチ選手は、1次ラウンドの南スーダン戦で大きな負傷を負い、現地で緊急手術を行い現在も入院しています。一日も早い快復を祈りたいと思います。

最終結果は、ドイツ | 23 | 24 | 22 | 14 | = 83

セルビア | 26 | 21 | 10 | 20 | = 77

セルビアはユーゴスラビア時代を含め、史上最多6度目の世界一を懸けて臨みましたが、惜しくも届きませんでした。

詳しい試合内容は動画をご覧ください。今回は、男子ワールドカップから私が見えたもの、感じたことを書きます。2つです。

1つ目はポジションレス化の進行です。読者の皆さんも気づかれたのではないかと思います。PG（ポイントガード）から C（センター）までのポジションに、各国のこだわりが少なくなった気がします。オンザコートプレーヤー全員がシューターであり、パッサーであり、ボールハンドラーでもあります。トランジション時のボールプッシュ（素早くボールを運ぶこと）にしても、非常に早い判断からドリブル、パスの選択をして、一気にリムランナー（ゴールに向かって走る選手）にパスを飛ばし、得点するといっ

たシーンが各試合随所に見られました。PGがボールをドリブルで運んだり、パスを供給したりして攻めるもの、といったプレーが減ったように感じました。

決勝でのドイツのシュルーター選手は、PGというポジションでの働きが多かったのですが、それでもボール運びに加わらず、ウイングのポジションで待ち受けF（フォワード）として、得点を狙う準備をしているシーンが増えたのがとても印象に残りました。

また、カナダのエディ選手 224 cm、カーボベルテのタバレス選手 221 cm、フィリピンのソット選手 218 cm、フランスのゴベア選手 216 cmなどは、Cとしてペイントに居続けるというよりも、外に出て中で合わせたり、リバウンドに飛び込んだりするシーンが多く見られました。もちろん、5アウトという戦術としての要素もありますが。

2つ目はディフェンスの強度が一段と増したことです。オールコートのプレスが増えていました。日本は言うに及ばず多くの国が戦術として、オールコートディフェンスを敷くことが多々みられました。ボールプッシュする選手に、ボディアップして簡単に運ばせないといった場面を数多く見ました。そして、3Pシューターに対するディスタンスのチェック、キックアウトやエキストラパスのチェックも、インテンシティ（強度）が高かったです。簡単に打たさないという意志がどの試合でも感じられました。

また、トラップ、スイッチの後のローテーション、リカバリーも瞬時に行われ、咄嗟の対応力に上質なチームディフェンスを見ることができました。

さてここで、上記の2つをU12カテゴリーの観点で見えていきます。

まず、世界のポジションレスの傾向についてです。よくU12のクリニックで講師の方が、「ミニバス時代はポジションの固定をせず、将来に向けてドリブル、パス、シュートに慣れるようにしたいですね」と言います。理に合っていると思います。ミニバスの選手はバスケットボールに取り組む始めの段階です。ファンダメンタルをしっかり身に付けることは、将来に向けて欠かすことはできません。

しかし、初めて取り組むとはいえ、ミニバスの選手にもストロングポイントはあります。すばしい、背が高い、ゴールに向かってシュートしようとする気持ちが強い、などです。これを生かさない手はありません。自分のよさを生かしてバスケットボールを楽しむ、自分の役割をしっかり果たす、自分の強い部分でチームに貢献するといったことは、バスケットボールがより好きになり、続けていこうと思う原動力にもなります。この辺をどう考え練習メニューに落とし込み実践するかは、コーチの腕の見せ所だと思います。

もう一つは、ポジションレス化によるトランジション時の、速攻からボール運びについてです。リバウンドからのトランジションを例にします。通常はディフェンスリバウンドを取った場合、ロングパスが出ないシチュエーションならば、PGにパスしてボールプッシュします。今回のワールドカップでも、日本や何か国かはこうしたプレーだったのですが、ボール運びをPGに任せずボールに近い選手が、ボールを受けプッシュしていた場面も数多くありました。

U12のカテゴリーで言えば、フィギアエイト（南の風で何回か取り上げたもの）の形です。フィギアエイトのボール運びはPGに任せずに、それぞれの判断でランナーとボールつなぎの役割を担い、プッシュするのですが、ミニバス時代は、誰でもがボール運びを経験するという観点から見ても、取り組む価値があります。（身に付くまでに時間はかかりますが）優秀なPGがいれば、任せることもいいと思いますが、素早さ、経験値を上げることからするとフィギアエイトはお奨めのボール運びだと思います。

私はW杯を通して、このような感想を持ちました。皆さんはいかがだったでしょう。